

# 05

## 名古屋学芸大学10周年記念映像制作

### NUAS 10th Anniversary Video Making of

映像メディア学科・教授  
Department of Visual Media・Professor

**渡部 眞** Makoto WATANABE

映像メディア学科・助教  
Department of Visual Media・Assistant Professor

**柿沼 岳志** Takeshi KAKINUMA

映像メディア学科・助手  
Department of Visual Media・Research Associate

**戸田 香** Kaori TODA

## 要約

名古屋学芸大学が創立10周年を迎えた2012年。映像メディア学科の教員が中心になり、道標としての映像を形にした。大学の目的である優れた人材の輩出というを考え、社会で活躍する卒業生との言葉を中心に織り込んだ2部構成の映像を制作した。その制作経緯をまとめたものである。

## 1 映像制作 (渡部 眞)

### 1.1 発案

井形学長からご提案があったのは2011年6月であった。翌2012年の夏に10周年記念式典を行うということで、その前後に講演会、イベント、シンポジウムが学部や研究所ごとに行う計画が発表された。映像メディア学科はそれぞれの事業に関して映像などの人材・機材の面で協力することになったが、同時に全学部を網羅して、「この10年間を考える」というテーマの短い映像を制作することになった。

### 1.2 企画

記念映像が建物の誇示や大学の栄光のみでつづられていたら見るものが興ざめしてしまう。もちろんあっても良いが、それは別のところに記されるべきだと思う。大学の10年は建物の歴史でもなければ教員の歴史でもない。意欲のある青年たちとそれを導く教員たちとの出会いの場であったはずである。だからそこを通過した青年たちが中心にあるべきだ。ここは卒業生と教員たちにストレートに気持ちを語ってもらうことが大学の本当の空気を感じてもらうことになるだろうと思った。そこでテーマを「人間関係」に絞ることにする。作品時間は10分と考えた。この映像は記念式典やイベント、オープンキャンパスで流されることが予想されるので短くまとめることを考えた。

### 1.3 構成案

結果は二部構成になった。第一部は教員を中心にした8分で、第二部は卒業生を中心に構成して20分という形になった。用途によってこれらを組み合わせることができるように考えた。

第一部では教員全員の話を伺いたかったが難しいので学長、学部長、副学部長、学科長という限定をした。それでも10人の話を伺うことになる。これを10分以内にまとめるということは一人30秒ほどの持ち時間である。

第二部は卒業生を中心にし、各学科の先生方に推薦をいただくことにする。それぞれの領域でいきいきと活躍されている方ということで要望を出した。

これらの冒頭にはNUASらしいタイトルが欲しいのでアニメーションを考え、卒業生で助手の江口詩帆さんに依頼、また最後にはダイナミックなヘリコプター撮影も映像の広がりとして必要だろうと考えてその段取りを柿沼助教に依頼した。

## 2 撮影日誌 (柿沼岳志)

### 2.1 プリプロダクション

記録を見ると、渡部眞先生による構成原案がメールで送られてきたのは2012年の2月29日とあるから、私がこの企画に関する会議に初めて呼ばれたのはその少し前のことであるはずだ。

当初その会議には私は参加する予定ではなかったのか、呼び出される直前まで何も知らされていなかった。電話を受けて慌てて打ち合わせ場所まで走って行ったのを覚えている。会議室でも最初はそもそも何の会議なのかさっぱりわからず、細江保司事務局長と坂倉弘一法人事務局長付課長(前総務課長)の顔を交互に見ながら何とか話しの筋について行こうとした。途中から前々から噂だけは聞いていた『名古屋学芸大学の10周年を記念した映像作品』の作品制作についての会議であることが分かってきた。確かに私は渡部先生と一緒にそれを担当することになっていた。

聞けば7月7日が作品上映だと言う。私はそこで話されている作品内容のボリュームから一年を通した撮影だと思い、てっきり上映は来年度だと勘違いした。そのことを口にするとうを寝ぼけたこと言ってるんだ君は、と皆に笑われ、つられて私も頭をかきながら、ははは、いや、すいません、勘違いしてました…等と言っていたが、いやしかし笑い事じゃない。そのスケジュールであればすぐに取りかからなきゃ間に合わないじゃないか！途端に私はそわそわし、慌てだした。—そういう訳で私たちのほぼ半年に渡るプロダクションサイクルはスタートしたのだった。

前述の通り、渡部先生よりの構成原案が送られてきたのは2月29日である。その原案には『NUASの夢』という仮タイトルが付いており、『名古屋学芸大学10年からの出発』とサブタイトルが続いていた。内容としては井形昭弘学長を筆頭に管理栄養、ヒューマンケア、映像メディア各学部長インタビューを中心に、卒業生の紹介、学校行事、研修、留学などで構成されており、最終的に卒業生の紹介を独立したものとして別作品にした他はその骨子を完成した作品は忠実にぞっている。

私はその構成を元に坂倉氏より依頼された事業計画書の見積もりにかかり、平行して撮影スタッフを集め始めた。スタッフイングとしては、企画、構成、演出、撮影、編集を渡部先生。編集は当初卒業生の編集マンに依頼することになっていたが、彼の予定が合わず、結果的に渡部先生が行うことになった(卒業生は忙し

いのだ)。撮影助手には映画ゼミ学生の殿村亮くん、首藤英夫くん。録音部にはサウンドゼミより森幸長先生に録音指導と整音、MAとして参加をお願いし、現場での録音は同じくサウンドゼミ学生の錦見尚希くんを担当して貰うことにした。私は制作全般を担当する。要所要所で他学生の参加を要請したが、基本的は同じメンバーで撮影は進んだ。コンパクトでまとまりのあるいいチームだったと思う。

3月3日に渡部先生より本年度から助手として就任することになっていた卒業生の江口詩帆さんにオープニングのストップモーションアニメーションの制作発注がされ、6日には同じく卒業生で、現在は若尾総合舞台社に勤務している菊池紗矢さんに音楽発注を行った。江口さんは在学中に卒業制作『ガラス男の恋』で「第1回栄芸術映画祭ショートムービーコンペティション」のグランプリを受賞した優秀なストップモーションアニメーターであり、菊池紗矢さんは『えんぴつ記念日』でCDデビューを果たし、ユニット『紙コップス』でも活躍するインディペンデントミュージシャンである。残念なのは参加して貰ったために彼らから「活躍する卒業生」としてのインタビューが撮れなくなってしまうことだった。皮肉なものである。

事業計画書も認められ予算処理の仕方も決まったところで、いよいよ撮影開始だ。最初の撮影は卒業式の実景撮影である。ただし、雪の日に渡部先生がひとりカメラを担いで学内を歩いているところをお見かけしたりもしたので、本当の撮影開始がいつだったのか、私にも正確にはわからない。

### 2.2 プロダクション

#### ●3月20日

卒業式当日は卒業式及び周辺の映像を押さえた。我々教員は当然卒業式に出なくてはならないので撮影は渡部先生の指示に従って、学生が担当してくれた。3台のカメラで舞台正面、下手、2階席よりそれぞれ撮影する。卒業式の撮影を終えると、学内を回りながら式の余韻にふける学生たちや保護者の方々を撮影した。

#### ●3月28日

学長室にて井形学長のインタビュー撮影。日程の調整、当日の様々な配慮など、立花万斗香秘書に大変お世話になる。一括で管理されている空調を撮影中に止めて貰う算段など撮影につきものの面倒な手続きを一手に引き受けてくださった。

井形学長は明快な回答と一貫してポジティブな姿勢、こちらを無条件に武装解除させてしまう素敵で笑顔で文字通り本作の顔となっていた。作品の冒頭と締めには井形学長の笑顔があることによって、作品のトーンがあくまでポジティブな方向でまとめることが出来たように思う。

学長のインタビューを終えた後、撮影スタジオに主立ったスタッ

フト向かい、照明を中心としたテストを行う。近く予定されている、管理栄養、ヒューマンケア、メディア造形各学部長のインタビューのセッティングのためである。

渡部先生のプランニングにより各学部に対応しい背景作りをテストする。撮影スタジオには(当然だが)何もしなければ白いホリゾントがただぼかんとした背景としてあるだけだ。そこに照明でキャラクター付けをしていく作業は文字通り“光で描く”作業であり、ベテラン撮影監督、渡部眞の真骨頂である。端から見ていると本当に楽しそうに遊んでいるようにしか見えないのだけれど、言うまでもなく極めて高度な技術によるものである。

渡部先生は以前撮影した、映画俳優・松田優作氏のドキュメンタリー『SOUL RED 松田優作』(御法川修監督2009年)で松田龍平氏や浅野忠信氏など多数のインタビューを行った際の経験を踏まえ、進化応用させたものであると仰っていた。

#### ●4月2日

3月20日の卒業式の撮影に準ずる形で、同じく学生による撮影で行った。同じ空間を同じカメラ位置から撮影しているのに意味合いは正反対である。思えば不思議なものだ。

#### ●4月24日

映画ゼミの「卒業研究」内でゼミ生と共に、スタジオでのセッティング。2月28日に行ったテストを踏まえ、必要なものを準備し、セッティングに望む。インタビューは翌日4月25日に行うことになっていた。その前にも撮影スケジュールを組んでいたのだが、多忙を極める各学部長が一堂に会するのは至難の技であった。調整をお願いした坂倉氏には多大なご苦勞をおかけしたと思う。

#### ●4月25日

午前10時よりメディア造形学部長・木村一男先生、11時よりヒューマンケア学部長・末松克己先生、昼食を挟んで、午後一時より管理栄養学部長・山中克己先生のインタビューを行う。各学部長のインタビューはそれぞれの学部紹介の骨格になるものであり、非常に重要である。細かい説明はいくらでもナレーションやテロップで行えるが、やはり学部の根になるコンセプトは学部長の皆さんの口から語っていただかなければならない。

それぞれのインタビューを30分ほど収録した後、照明・背景替えを行い次のインタビューに望むという段取りで、スムーズに進む。途中、渡部先生より新たなアイデアが幾つも付け加わったが、事前の下準備が出来ているので、特に問題もなく進んでいく。段取りとはこういうことだ、と参加したゼミ学生たちも勉強になったのではないだろうか。

#### ●5月9日

この日は天気予報では午後より雨天とのことで、雨養生をふまえた準備を行う。結果的に天気はもってくれてことなきを得た。

まず井垣理史先生の担当される「デジタルデザイン基礎 I」の

撮影。パソコンに向かって様々なパターンのデザインを行う学生たちの姿を収めた後、デザイン工房に移動して河村暢夫学科長の「デザイン基礎 I A」にて陶芸の釜出し作業を中心に撮影を行う。授業の合間を縫って河村学科長のインタビューを撮影。この時に収録した内容は、録音状態と構成上の問題とで後日再撮影を行うこととなってしまった。

#### ●5月10日

この日は映像メディア学科を中心とした撮影である。午前中に西宮正明メディア造形学部副学部長のインタビューを撮影するが、西宮先生のアイデアで自身の動画作品を投影しながらのインタビューとなった。この日は2限に学科の特別講義が入っていたのと平行して写真セクションの作品搬入が同じ教室で行われたために、時間がない中での複雑なセッティングとなり、スタッフ一同と村上将城助教、ヘルプに来てくれた戸田香助手らと大慌てで準備し、収録を行った。無事に終了したが、くたくたになった。

午後になって映像メディア学科の授業風景の撮影を行う。まず3限から渡部先生ご自身が担当されている「映像メディア演習(映画・ビデオ)」の撮影である。当日は照明演習にあたっており、一番動きのある映像が撮れそうだと目論んだのだが、光量、種類の違う複数の照明が次々とたかれるので、撮影を担当した学生、殿村くんは随分苦勞したようだ。

その後、佐近田展康先生の「映像メディア演習ゼミ(サウンド)」、稲垣敏彦先生の「ドローイング」の授業にお邪魔する。特に本年度で退官される稲垣先生の授業はそのお人柄そのままに静謐と言っていい時間が流れていたのが印象的だった。そのまま中庭に出て、光幸國先生の「映像メディア演習(フォト)」を撮影し、この日は終了した。

#### ●5月11日

この日は学生と私のみで「押井ゼミ」と「クリエイティブ・アニメーション基礎論」の押井守先生担当回を撮影する。

この授業は複数の教員が順繰りに担当するオムニバス形式の講義であり、この日は世界的に著名なアニメーション作家であり、映画監督でもある押井先生の担当回にあっていた。凄まじい饒舌さで知られる押井先生であるが、この日もその例に漏れず、百科事典的な知識を元に言葉の奔流とでも言うべき講義を繰り広げていたが、残念ながら全体のバランスから見てカットとなってしまった。押井先生は授業風景として扱うにはあまりに目立ち過ぎてしまうのだ。

#### ●5月15日

午後に入ってすぐヒューマンケア棟でロケハン。釜賀雅史ヒューマンケア学科長のインタビューに対応しい場所を探す。ヒューマンケア棟を散策した結果、2階廊下にて各国の子供たちの笑顔をバックに撮影することにする。

ヒューマンケア事務所前で待ち合わせをした後、釜賀先生のインタビューを撮影。複雑な経緯を経て設立されたヒューマンケア学部の歴史、それに伴うご苦労などをお伺いする。

その後は教室に移動し、授業風景「うたとピアノ」(藤井正子先生)。児童に指導することを想定して振り付きの歌をグループで披露する学生たち。誰も照れたり、恥ずかしがったりする学生はいない。ちょっと感心してしまう。

#### ●5月17日

ヒューマン棟にて近森けい子先生による「学校保険実習」の授業風景を撮影。眼科検診の演習などを収録した。

#### ●5月19日

この日はメインスタッフが都合がつかず、別班を立てて管理栄養学部の授業の一環である田植え風景を撮影する。本校から十分ほどの場所に大学で借りている田んぼがあるのだ。つくづく同じ敷地内に多様な学部があるものだ。

#### ●5月20日

今回の撮影の中でもハイライトのひとつである空撮に臨む。本当はひと月ほど先に予定されていた撮影であったが、機体のメンテナンス上の都合で慌ててこの日に再設定した。一時は別会社に依頼することも考え調整したが、撮影に適した機体を保有する航空会社は限られており、結果的に日程を大幅に前倒しにすることにしたのだ。ただ、これ以降の日程であると季節柄天候の問題が出てくるので、少々慌てはしたが決行したのは悪い判断ではなかった。

数日前に今回の飛行を依頼した「朝日航平洋株式会社」の営業担当・真山陽一氏に大学までご足労いただき、渡部先生と空路に関する打ち合わせを詳細に行った。撮影前の天候判断を待ち、無事予定日に決行となった。

当日は10時45分に名鉄犬山線「西春駅」で集合し、タクシーで中部国際空港へ移動。11時の到着と同時にパイロットの長畑圭一機長と改めて打ち合わせを開始する。打ち合わせを終えると格納庫に移動し撮影準備にかかる。

衝撃を緩和する撮影撮台にカメラをセッティングするのだが、大学で使用しているカメラはコンパクトで機動性に優れている一方、カメラとしての重量は軽い。緩衝用のバネがその重量を跳ね返してしまうので、サンドバック(重し)等を乗せて調整し、バランスを取っていく作業が渡部先生を中心に入念に行われた。

また飛行中に万が一、落下物があった場合その場で撮影中止になってしまうので、(それ以前にある日突然、空から何か降って来たら場合によっては大惨事だ)あらゆるものが、ワイヤーで機体に固定され、同乗するスタッフも同じくワイヤーやら養生テープやらでぐるぐる巻きにされる。

そんなことをテキパキと準備した後、予定時間より随分と早かつ

たが、スタッフとカメラを乗せたヘリコプターは大学上空に向かって飛び立っていった(私は残念ながら空港でお留守番)。

撮影は問題なく進んだようで、予定より早くヘリコプターは戻ってきた。飛行時間によって料金が請求されるので当初の見積もり額よりも請求額は30%ほどディスカウントされていた。スムーズな撮影は予算面にも貢献されるのだ。

空撮によって大学の全景がしっかりと押さえられたと同時に、やはりダイナミックな映像は作品のなかでも大きな印象を残しているはずである。

#### ●5月22日

前日の田村明管理栄養学科長との打ち合わせを経て、「給食調理実習」(野村幸子先生)の撮影を行う。

調理実習とは言っても百人分の献立を午前中かけて数十人の学生たちが調理するという、なかなか大掛かりな授業である。

撮影スタッフも白衣に白帽を身につけて撮影に向かう。なにせ厨房に入るの、衛生面でも万全でなくてはならない。食材の搬入から準備、調理風景を収める。

昼食後、「生化学実験」撮影の合間を縫って、田村学科長のインタビューを行う。国家試験や海外実習などの実績を踏まえたお話は確かな説得力があった。

#### ●5月28日

渡部先生は東京から、私と学生スタッフは名古屋からそれぞれ浜松に入る。管理栄養学科卒業生で深谷文香さん(管理栄養士)の仕事風景を撮影するためだ。この日から本作のもう一本の柱である卒業生パートに平行して取りかかる。このパートは最終的には独立した一本の作品となった。

浜松駅で待ち合わせをした後、タクシーで浜松医科大学病院に向かう。ロビーで深谷さんと待ち合わせる予定がなかなか彼女は姿を見せない。聞けば仕事がなかなか終わらないという(卒業生は忙しいのだ)。

しばらくして、やっと彼女と会うことができ、彼女の仕事部屋でインタビューを行った。管理栄養士として患者さんの献立を彼らの健康状態に合わせ管理していくという彼女の仕事についてお話を伺った。さぞや、プレッシャーのかかる仕事であるだろうと思うのだが、爽やかな笑顔で淡々と語る彼女の姿は確かにプロだった。インタビュー終了後、彼女の仕事風景を撮影させて貰うことになった。我々は少々待機し、渡部先生がひとりハンディを抱えて撮影を行った。

終了後、病院の実景を撮影する。タクシーの運転手さんに頼み、病院の全景が見渡せる場所を探す。遮蔽物が多く、なかなかよいポイントが見つけれず、少しばかり走りまわることになったが(病院自体が改装中で工事の足場自体も邪魔になった)、最終的には適切な撮影場所を見つけることができた。

撮影終了後、会議を控えていた渡部先生は私たちより一足早く

新幹線に飛び乗っていった。

実はこの日撮影をしていたのは我々だけではない。デザイン学科恒例の集合写真の撮影が中庭周辺で行われるので、学生スタッフで別班を組み撮影を行っていたのだ。

### ●5月29日

撮影本隊(とは言っても3名だが)が撮影準備にかかっている間に、私だけ管理栄養学科に前乗りし、保護者の方々に撮影の許可を取る。今日はヒューマンケア学部「保育実習指導Ⅰ」で幼児と学生が触れ合う授業を撮影するためだ。保護者の方々の前で撮影趣旨を説明し、撮影の許可をお願いするのだが、皆さん快く認めて下さった。泣いたり笑ったりお母さんの姿を求めて逃げ出そうしたりする赤ちゃんたちに四苦八苦する学生たちを収録した。

撮影後、ロケ車に機材を詰め込むと名古屋市内に向けて移動。今日はこの後、3カ所で卒業生のインタビューと仕事風景を撮影させてもらう予定である。

まずは中区栄、「株式会社スタジオバク」へ。「スタジオバク」は本校非常勤講師である前野漠先生が会長職に就いておられ、毎年映像メディア学科の卒業生より数名を社員として受け入れて下さっている。現在も7名の卒業生がスタジオに所属している。この日はちょうど新しく建てたスタジオの清掃に全スタッフが駆出されており、新スタジオと、本社屋双方での撮影となった。まずは新スタジオで荒川遼行さん(カメラアシスタント)。次いで本社屋に移動し、平野阿裕美さん(アシスタントカメラマン)、荒深えりかさん(画像処理)それぞれ順に撮影していった。特に平野さんは前野先生との対談形式のインタビューも併せて撮影することができた。よく知っている卒業生たちだったが、随分と頼もしく見えた。

昼食を取った後、今度は中区丸の内にて「株式会社エフ・ジー・ジー」にてファッション学科卒業生、今井沙織里さん、牧のぞみさん(舞台衣裳スタッフ)両名を撮影させていただく。「株式会社エフ・ジー・ジー」は舞台衣裳を専門とする衣裳会社である。華やかな衣裳が並ぶ倉庫兼作業場部の中で、ミシンに向かう彼女たちを収録する。明るくけげんと笑いながら、楽しいことも苦しいことも区別なく話し続ける彼女たちが印象的だった。さぞや楽しい職場なのだろう。

その後大学に戻るような格好で名東区一社の「トーヨーキッチン&リビング株式会社」にお邪魔する。ここではデザイン学科卒業生、伊藤高志さん取材させていただいた。トーヨーキッチンはシステムキッチンを中心としたインテリアコーディネート提案していく会社である。立て板に水のように話す伊藤さんのインタビューを収録した後、スタイリッシュな店内の様子をカメラに収めた。

## 2.3 書き起こし／抜粋

ここまでロケーションを中心に書き進めていたが、実際は撮影と平行して編集に向けての下準備を行っている。現在撮影の収録

フォーマットはデータ収録を中心としており、それを映像メディア学科の所持するISISという大容量サーバーに取込むことから編集作業はスタートする。(バックアップとして2tb外付けハードディスク二台使用した)取り込みが終わったところで、撮影日や内容別にフォルダ分けをしながら収録内容を確認した上で整理を行う。これが撮影スタッフのロケ終了後の日課である。

この後、ドキュメンタリー撮影においては必須の「書き起こし(キャプション取り)」という作業を行う。取材対象者が話した内容を一字一句漏らさず書き起こして行くのだ。その際にデータのタイムコードを同様に採録し、データのどこにどんな内容の言葉が収められているかを明確にしておく。この作業は撮影スタッフ以外の学生に協力を仰ぎ、我々がロケに出ている間にコツコツと進めて貰った。

ドキュメンタリーの編集においては会話の内容の前後を自在に入れ換え、場合によっては、てにをはを作り変えさえて会話の内容をある意味“創り出していく”つまり収録された会話を元にシナリオを作っていくのだ。

この書き起こしをした紙を元に渡部先生がラインを引き、一旦紙上で抜粋を作る。それに準じて私が映像のデータを整理する。この際に必要なのが“つまみ”作業である。会話である以上、必ず言いよどみやいい間違い、どもりなどが生じる。それを細かく摘んで会話の内容がスムーズになるように整えていくのだ。これをベースに渡部先生が実際の編集作業を行う。ロケの合間を縫ってこのような地道な準備作業を学生と共に行っていた。

### ●6月11日

例によって渡部先生は東京から私たちは名古屋から、それぞれ鈴鹿入りした。今日は鈴鹿市立加佐登小学校を訪ねる。ヒューマンケア学科卒業生で栄養教諭である中西さちさんを取材させて貰うためである。

小雨がぱらぱらと降る中、小学校の外観を大急ぎで撮った後、給食室の前で中西さんのインタビューを収録する。その後、実際に昼食を摂る児童のみなさんを撮影した。カメラに向かって笑顔で手を振る児童たちを自然に撮影するのは大変だったが、楽しい撮影だった。

最寄り駅である加佐登駅から名古屋へ向かう列車は1時間に1本しかなく、これを逃すと次に来るのは当然1時間後である。結局三脚やカメラを担いでばたばたと走る羽目になったが、何とか間に合い、帰路についた。

ここで一旦、撮影は終了し、編集に向かうはずであったが、ことがそう簡単に終わるはずはないのであった。

### ●ポストプロダクション／リテイク／追加撮影

ここから渡部先生とヘルプで入ってくれた戸田助手(結果的にヘルプどころの作業量ではなくしっかりとメインスタッフになってくれた)より本格的な編集作業に入る。編集における現実的なレ

ポートは戸田助手の稿に譲るとして、作業的な歩みを記す。

本編集に関しては当初予定していた会社がスタジオ状況でなかなか押さえられず、本学科非常勤講師である横井照政先生のご紹介で「株式会社Zaxx」という会社に決定した。本編集というのは編集された映像にテロップや効果を加え色身を整えた上で最終的な完成形を作る作業である。この作業には特化された技術とセンスが求められ、専門のスタジオの設備とプロの編集マンが必要とされる。

編集日は6月28日となった。そこまでに仮編集をすべて終えなくてはならない。加佐登小学校の撮影から2週間を切っている。江口助手が別班で作成していたオープニングのストップモーションアニメーションも仕上がってきていた。

編集作業を行いながらいくつかリテイク(再撮影)行う。まず、卒業式の後に撮影したメディア棟の全景。3月でまだ樹々に緑がなく、いささか彩りにかけるために再度、ヒューマンケア棟高所より再撮影を行った。次にメディア棟、4階廊下よりレ・アール棟を左手にバス通りをなめて図書館方面へ向かう移動撮影。これも以前撮影済みであったが、メディア棟全景再撮と同じく樹々の彩りの問題で再トライ。廊下に数メートルのレールを引き、ダイナミックな移動撮影を行う。

各所実景。各学科棟、図書館内外観、学長石像など。特に図書館前の「名古屋学芸大学」石盤付近は次々とやってくる業者の車両や学バスと戦いながらのせわしない撮影だった。

渡部先生インタビュー。本作の作者でもある渡部先生だが、やはり学科長としてのインタビューを残さない訳にはいかない。メディア棟の外に面した廊下で撮影。やはり学バスが続々とやってくる上に学生たちのはしゃぐ声が四方八方から飛び交っており、録音を担当した学生(錦見くん)は苦労したようだ。なかば笑い話であるが、途中、「渡部先生、そんなところで何をやってらっしゃるんです？」などと話しかけてきた映像教員によってコメントがNGになったりもした。

編集が完成に近づいてきた頃、極めて重要なリテイクと追加撮影が必要になった。まずはヒューマンケア学科の卒業生の撮影である。これまでは卒業生のインタビューは特に学科のしぼりとは関係なく、本編の中に加える予定であったのだが、編集中に実際の式典の段取りも加味し、卒業生インタビューを作品として独立させることに決定した。そうすると漏れている学科があるのは当然バランスが悪い。

そういう経緯でヒューマンケア学科卒業生の撮影を急遽行うことになったのだが、なにせその方向で決定したのが本編集前々日26日であったため、大慌ての撮影交渉となった。関係者一同で走り回った結果、何とか瀬戸市にある「菱野幼稚園」という幼稚園に勤務されている、阿部万祐子さんという卒業生のアポイントメントを取ることができた。撮影日は翌日27日である。ほっと胸を撫で下ろしたが、話はそれだけでは済まなかった。

記念式典において本校の校歌を作曲された三枝成彰氏の出席が急に難しくなったという話を少し前から耳にはしていた。ついにはビデオレターのような形でメッセージを収録するというのも。しかしよりによってその撮影日が2月28日本編集当日に決まったのだ。さすがにこれは渡部先生も私も無理なので、学生スタッフに向かってもらうことにし、撮影は渡部先生が本校の卒業生でフリーのカメラマンとして活躍している中津祐一さんに依頼した。

#### ●6月27日

27日当日は文字通り嵐のように過ぎていった。午前中に菱野幼稚園に向かい卒業生の阿部万祐子さん(栄養教諭)のインタビュー撮影を行うと、大慌てで大学に戻った。(会議を控えていた渡部先生は大学到着と同時に走って会議場に向かっていった)。我々は取り込み、書き起こしなどの編集準備を行う。

それだけではない。会議から戻ってきた渡部先生から本日の夕方より河村学科長インタビューのリテイクが決定したことを伝えられる。理由は前述の通り音声的な問題と構成上の必要性である。インタビューの時間まで渡部先生は今朝撮影して来たばかりの素材の編集。時間になり、デザイン共同研究室に向かい河村先生のインタビューを収録した。

無事に撮影終了後、今度は河村先生分の取り込みや書き起こし行い、合間を縫って翌日の三枝氏インタビューの機材積み込みも行う。後は深夜になるまで明日に向けた作業。渡部先生と戸田助手は編集(殆ど平行作業である)、私はテロップに使用するテキストの整理、確認。我々が家路についたのは深夜3時であった。

#### ●6月28日

午後より、「Zaxx」にて本編集。素材の取り込みに思いの外時間がかかる。現場について見るとオペレーターこそベテランの方だったが、偶然ついた編集助手は2名とも本学の卒業生であった。また隣の編集室では制作会社に勤務する別の卒業生が我々と同じく編集作業を行っており、しばらくすると今度は仕事で「Zaxx」を訪れた別の卒業生が話を聞きつけて編集室に顔を出すなど、「Zaxx」は卒業生だらけであった。名古屋の映像業界に我が校の卒業生が確実に根を下ろし始めていることを実感した。

実は「Zaxx」は当初の見積もり時より、いつも卒業生のみなさんにお世話になっておりますので、ということで料金を半額で出してくれていた。予定こそ合わず流れてしまったが、当初予定していた編集スタジオも同様の申し出をしてくれていて、卒業生の社会での貢献ぶりも大したもの、と関心した。今回の編集に関して言えば、予定時間を倍超過したので結果的に正規金額と変わらなかったのだが。編集志望の大学院生を見学に招きながら編集作業は進む。時間は確かにかかったが、最終的には何の問題もなくスムーズに終わる。終了時刻は午前2時。

## ●6月29日

森先生のオペレーションにより、ナレーション録り及びMA(サウンドのミックス作業)を大学の音響編集室で行う。ナレーターは森先生にご紹介していただいた複数のプロダクションの声優たちから渡部先生に声のサンプルを幾つも聴いていただき、株式会社NTB所属の小原ヒデシさんに決定していた。

小原さんは経験豊かなプロの声優さんであり、あっけないほど順調にナレーション撮りは進んでいく。ナレーションを終えると、菊池さんより上がってきた音楽(これもリメイクを受けて再録して貰った)を合わせ、全体の調整を取る。

MAは森先生の的確なオペレーションでスムーズに進み、予定時間より大幅に早く終了することができた(本当は安全をみて2日予定を取っていたのだ)。作業終了後、戸田助手の手により音声と映像を一本化し、やっと『名古屋学芸大学10周年記念映像』は完成したのだった。

7月3日に行われた学内試写では上映会場が温かい拍手で包まれたという。私は風邪で倒れていた。

## 3 編集・ポストプロダクション (戸田 香)

### 3.1 撮影から、映像編集

今回の記念映像の制作には出演のほか様々な年代の卒業生、そして在校生が制作に参加してくれた。制作・出演・内容ともに10周年記念映像のコンセプトを表したものとなっている。私も例に漏れず、卒業生かつ助手として本件に携われる事は大変感慨深いものであった。

目指すは名古屋学芸大学10周年記念式典で使用する5分程度(実際に完成したのは8分程度)の映像と主に卒業生のインタビューをおさめた20分程度の2つの映像の完成だ。しかしながら

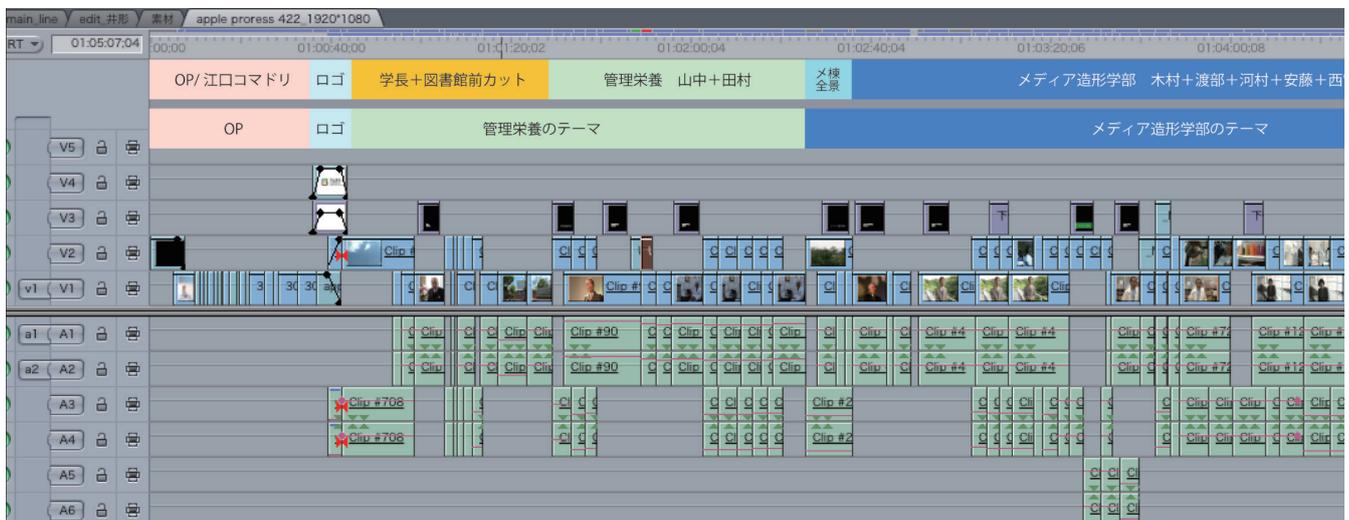
前述の柿沼助教の撮影日誌をご覧頂ければお解りのとおり、仮編集を行う段階ですべての映像素材がそろっているという理想的な環境とはほど遠く、撮影から編集の作業の流れは後半からほぼ同時並行というような状況だった。

撮影は全編(インサートに使用する記録映像をのぞいて)SONY HXR-NX5J によるAVCHD (Advanced Video Codec High Definition, エーブイシーエイチディー/H.264/MPEG-4 AVC方式圧縮)で収録された。カードやHDDへのデータ収録の形式を取る事で従来のテープ収録形式よりもパソコンへの取り込み作業の大幅な時間短縮となる。テープ収録では撮影した実時間が取り込みに必要だが、データ収録の場合本学科の映像編集環境ではデータの変換作業も入れて1/3以下の時間で転送が完了した。これは今回の映像制作のスケジュールを鑑みると、大きな成功要因だったと言える。

撮影が終わり次第、映像のOKテイクが撮影日ごとに管理されすぐに取り出せる状況にしておく。ここでは在学生(主に映画ゼミの学生)がヘルプにはいつてくれた。当たり前のようにだがこういった環境を常に作っておくというのは、非常に重要な事である。ただでさえ逼迫したスケジュールに加え、各スタッフが常にマルチタスクをこなしている中で、素材の整理整頓というのは至難の業だ。すべての素材が「見えている」場所にある事で、スムーズに編集作業が進む。機械的な作業は簡略化でき、どの映像とどの映像を組み合わせるか、並べるか、という事に注力出来る。

また撮影のスケジュールを鑑みて効率よく編集を行うために、必要な2つの映像を同時並行で編集していく必要があった。それには本学科に導入されているISIS5000という映像編集用のクラウドシステムが役立った。1つの映像素材を1台のPCでは再生しながらインタビューの書起し作業を行い、もう2台では同じ映像素材の仮編集を行うなど、撮影した同じ素材を並行して取り扱う事が出来た。

### 10th aniv 5min.ver 全体の流れ



共有していたタイムライン指示書

インタビューの書き起こしを元に素材のどこを採用するか渡部教授が判断しオフライン編集を行う。そこで映像内の時間をコントロールしたタイムラインを私が引き継いで整え、オンライン編集的な仕上げを渡部教授と協力して行った。渡部教授は撮影に編集にと一人で二役三役四役とこなされていて、仕事ながら勉強させて頂いた部分が多かった。

編集の技術的な部分は、映像編集用のクラウドサーバを使用しているという以外は通常の映像編集のフローと特に大きな違いはない。使用アプリケーションはAVCHD規格をそのまま読み込み／編集する事が出来ないFinal Cut Pro7を使用していたが、エンコードの手順を踏めばAVCHD規格がネイティブの他映像編集系アプリケーションと遜色なく映像編集を行う事が出来る。

## 3.2 素材の管理

今回は関わっているスタッフ(卒業生・在学生・教員)のスケジュールと制作進行の関係上、素材の管理と進行管理のマネジメントの部分が重要になる制作であった。関わっているスタッフが完成形のゴールイメージを共有し、それに向かって成果物を仕上げてもらふ事が不可欠であった。映像素材・インサート用の映像素材・オープニングアニメーション・録音素材・音楽素材・効果音・ロゴやテロップ素材・特殊効果など今回の映像を制作するにあたりひとつひとつの完成データを同時並行で収集し、揃え、ひとつのタイムラインに組こんでいく。特に映像データのコピーや移動は時間がかかる。そういった作業に無駄が出ないよう、すべての素材をISIS5000上で共有し、素材の調理作業場所の確保を優先的に行った。また制作を担当するスタッフのスケジュールの関係で、一堂に会しての打ち合わせや意見交換の場をもうけるのが物理的に難しくタイムラインに素材の要望を追記したものや、ラフ編集の段階の映像データをオンラインストレージ上で共有し、意思の疎通を図りながら制作を進めた。卒業生は既にフルタイムで働いており、その傍ら音楽を制作したり、映像を作ってもらふ形となった。

気がつけば、テロップ入れのためのスタジオワークのスケジュールが差し迫っていた。それまでに「白完」(白完パケの略・編集が終了したが、MA、テロップが入っていない映像)を仕上げなくてはならなかったが、映像素材の調理作業場所の拡張していたおかげで、スタジオワークの前日まで撮影スケジュールが伸びた事や、完成間近の段階でのリテイク撮影や森講師・サウンドゼミ学生の錦見くんを担当して頂いたMA作業で上がった音声データの差し替え、また取材先からの修正の要望などにも作業時間は深夜まで及んだ事もあったが、なんとか対応する事が出来た。

本学科における授業用撮影機材の変遷が物語るように、撮影・収録のメディアフォーマットはかなりの速度で変化している。インサート用の映像を各学部、各学科にご協力頂き用意する事となったが本学設立から10年の間に記録された様々な時点で記録

された映像素材のフォーマットを、今回制作する映像のフォーマットへ合わせるために編集の前段階で「調整」をする必要があった。本学設立からのビデオ収録規格は収録メディアは違えど、映像業界とはほぼ同じ変化を辿っている。時期によってはこれらが混在している状況にある。また、DVDなどのファイナライズ(一般のプレイヤーで視聴可能な状態)されたメディアから映像素材をリップングして使用する必要もあったので素材の下ごしらえを行う場面が多々あった。

日ごとそれは変化し続けており、現在活気のある4K(水平画素数4,000×垂直画素数2,000前後の画面解像度を持つ動画フォーマットの総称度)もいつか8K(水平画素数8,192×4,320垂直画素数前後)解像度の映像が主流となれば、今までの映像規格(解像度)が辿ってきた道のりと同じことが起こる。

現在、特殊な機材となってしまう、再生すらままならない映像メディアが多く存在するが、今後はさらに早いサイクルでそれが起こるだろう。そうなってくれば、大学という研究機関の中でしか出来ないことのひとつとして技術革新や時代の流れに関係なく、映像を出来るだけに遺すという役割が、今以上に重要なものとなってくる。

今回、たった10年間の歩みを描くのでさえ「あの時のこの画」があれば、と強く想うことが多かった。あらゆるモバイル機器に撮影機能がつき、撮影は大変容易となった。しかし、撮りっぱなしになった映像を管理し、適切なものだけ遺して後世に伝えていく手段は、まだ考慮の余地があるだろう。今回の映像の中で西宮教授が言及されていたように、移ろい易く、忙しく変化していく時代だからこそ、映像によって「記録」して「遺す」という事が至要である。

## 4 仕上げ作業(渡部 眞)

### 4.1 素材集め

この映像制作はインタビューをまとめて作り上げるということで、手法としてはドキュメンタリーという分野に入る。撮影の仕方も異なる。ドラマ撮影のように俳優が準備してくるわけでもなければ、背景を選択できるわけでもない。しかしなるべく本人の環境と一緒に撮影したいと思う。なぜならそこが一番被写体にとって安楽な場所で話もし易くなるはずだからだ。とはいうものの、撮影に適した場所ではないことも多く、照明や撮影機材のセッティングが困難だったり、騒音が響いていたりする。

普段気がつかない空調や冷蔵庫の低音などはマイクで拾うと大変大きく聞こえ、インタビューが聞き取りにくくなる。これらを事前にチェックすることが肝心だが、それが出来ないときには即座に場所を変更して進めていかなくてはならない。

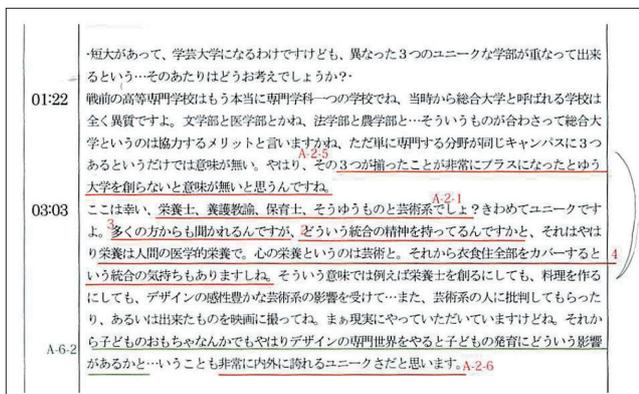
また人は話すときにかなりバラバラのフレーズを並べながら話すもので、聞いている時はわかったように思うが、あらためて聞きなお

## 5 上映

すと支離滅裂であることが多い。特に短くまとめるときには論点が鈍り、あいまいになる。これを編集作業でまとめていくことで筋の通った論理に直していく。と同時に短くして時間を収めていくのだ。

これもドラマ制作にはまったくない作業である。ではどうやるかというところから話されたことをすべて書き起こしていく。(次図参照)これは話された通りの言葉を記録していくことであるから、「えー」や「んー」も書き込んでいく。意味不明の言葉や間も構わず書き連ねて行くのである。文字を時間軸に沿って並べることで、インタビューの記録ができる。

これを元に文字編集をしていく。ここで語り手の真意を外さないように文章を再構築して行くのであるが、ここが最も時間がかかる編集作業である。といっても映像のみでこの作業をしようとすると更に時間がかかるので、文字という媒体が最適である。さてこれでできた映像はどうなっているかというところ、言葉本位につながっていることで意味はわかるが映像自体はブツブツに途切れていて一貫性がない。



インタビューの書き起しと並べ順の指示番号  
(使う部分を下線でチェックしているが実際に使ったのは2行だけである)

次に行うのはこの編集点の細切れを綺麗にお化粧するという作業である。話している内容を具体的に見せている映像や、話している周りの風景、本人の顔、時には飛躍した映像や、詩的な情景などを挟み込む。今回は各学部の授業風景や資料などをつないでいった。

これら一連の作業でもっとも神経を使うのはテロップ入れである。テロップとは画面に入れる文字のことで、出演者やスタッフの名前を映像にはめ込むことである。絶対に誤字は許されない事になる。

音楽は菊地紗矢さんに作ってもらった。打ち合わせ時に使用尺数と希望バリエーションの数を伝えた。構想としては学部の数だけ流れる音源を変えたかったが、結果は重複を避けつつ使いまわしをすることになった。しかし持ち前のセンスを活かして学部の雰囲気をもっと表現してもらったと思う。

仕上げの最後はMAと呼ばれる音付けになる。ナレーション、効果音、音楽と映像のバランスを測りながら全体の大きなバランスを調整していく作業である。

### 5.1 試写

最終試写は評議会の席で行われた。各学部のバランスが取れているかどうか気がになった。構成としては学部長が理念を語り、学科長が苦心のエピソードを語るという形になっており、両者のバランスの良さが全体に影響するはずであった。結果言葉の訂正は受けたもののこの学部からも良い評価を得て試写を終了することができた。

### 5.2 記念式典会場下見

7月3日に東急ホテルの会場下見をする。前方スクリーンからの距離、中間モニターの大きさと高さ、椅子の間隔などをチェックし、設置予定のプロジェクターの輝度なども確認する。こういったことは映画公開の時にも行われる。会場によって広さや明暗が異なるため、音量の調整や輝度調整が必要になるためだ。もちろん参加者人数によっても音の反響が異なるので時にはこうしたことも考慮にいれなくてはならない。

### 5.3 記念式典当日

7月7日(土)大村知事、荻野日進市長、近隣大学学長ほか関係者などたくさんの方々のご臨席を得て式典は挙行された。映像はその口火を切るように上映され大学の沿革と学部の紹介を中心にしつつ、この10年間を語った。会場の基本照明を暗くしたものの、完全な暗転にしなかったため黒のしまりはなく浮いていたが、それは納得せざるを得なかった。音量などは適切であったし出席された方達からも好評であったのでこれは良しとするべきであろう。なによりも学びの場としての大学をリアルに伝えられたのは満足している。

### 5.4 オープンキャンパス

この後一年間この映像を使うことになる。たとえば式典とは異なる状況としてオープンキャンパスがある。ここは入学希望者に大学の学習内容やキャンパス生活を紹介する場であるが、同時に卒業生のキャリアを具体的に見せることでその後の将来像を結ばせる必要もある。今回の記念映像は入学希望者の活気ある卒業後とその夢の実現ということにつなげられると信じている。

### 5.5 オーサリング

最終的にこの10周年記念映像はブルーレイ(Blu-ray)ディスクやDVDディスクにオーサリングされて記録され配布された。編集とマスターディスク作成を担当した戸田助手はディスクを制作するにあたり、撮影時に想定しなかったフィルタリング処理などに苦

労したが、秋口にマスターディスクを完成させた。

このディスクは本学で行われる行事やイベントなど、様々な場所で使用される。

## 6 10周年映像の出来栄

### 6.1 記憶の記録

フランスの映画監督アラン・レネの作品で「世界の全ての記憶」(Toute la Memoire du Monde 1956)という短編がある。国立図書館という書物の集蔵庫を扱った傑作であり、フランスが国を上げて文化を守ろうという姿勢とそこに携わる人々の作業の手際の良さがあいまって感動を湧き起こさせてくれる。ミニマルであるがゆえに美の深淵を垣間見せてくれる作品である。

「記憶の記録」とはそれを意識したものである。ひとが記憶したものを記録しても事実との距離がある。なぜなら記憶した時点ですでに相当の主観が入り込んでいて、客観的とは言いがたいからである。

大学に対する学生の記憶はなんだろう。曖昧であてにならない。誤解であったり、記憶違いであったりまちまちだ。

しかし人は不思議なもので記憶になった途端に確信を持って心に貯まっていく。大学に対する思いはそれぞれ違うけれど、なにか集団の記憶とでもいう不思議な統一感がある。おそらくこれが母校に対する「懐い(おもい)」の正体なのではないか。学生たちの記憶はまったく異なる。だからこの映像も「正しい記録」を残すために作ったわけではなく、むしろ記憶を想起するための手がかりになっていれど願う。

レネが次作「去年マリエンバートで」(L'Année dernière à Marienbad 1961)で記憶の危うさを映像で構成した時、その下層に前作「世界の全ての記憶」の仕事があったことは疑いようもない。

私はまったくレネを真似ようとしたわけではないのだが、こうして完成した作品を見ると教員も学生も大学というぼんやりとした集蔵庫に閉じ込められた記憶そのもののよう思えてくる。

### 6.2 卒業生たち

こんなことを書いたのはインタビューしていて不思議なことに気がついたからだ。卒業生たちはまったくしたたかに生きていて、大学で学んだ技術を社会の中で見事に開花させているのだが、大学時代のことを聞くと「ほとんど」か「まったく」覚えていないということが多かった。

拍子抜けするくらい大学時代に何を習ったのかを失念しているのだ。熱心に教育に携わっている教員の方たちにこれを伝えるのはためらいがある。日頃私事を忘れて学生への対応をしている教員が多いのを知っているからだ。しかし卒業生たちはあつけ

らんかと「あまり習わなかったし覚えていない」と明言していた。「真剣にやっていなかった」とも。そして自信満々に現在の仕事ぶりを語った。

初めは怒りすら覚えたし、虚しい気持ちにもなった。しかし編集室にこもって何度も見直すうちにある事実気がついたのだ。それは彼らの職業がすべて大学時代に専門で取っていた科目の延長であり、その記憶とはうらはらに実に色濃く大学で学んだことの延長線上でしか現在働いていないということに気づいたのである。彼ら(彼女ら)は大学入学当初はそんな職業があることすら知らなかったはずで、その仕事を目指して大学に入ってきたわけではない。しかし名古屋学芸大学で学ぶうちに知識を獲得し、そういう職業があることがわかり、人間関係を広げていった。しかし次第にそれが当然のことと思えるようになり、環境を作ってくれた大学を忘れ、すべて自分の意思で推し進められたと考えていくようになっていったのだ。

私はこの傲慢さを許したいし頼もしいとすら思う。勝手に記憶を書き換えていくことで個人の記憶は堅牢なものになっていくのだから。こう考えるようになって、いま私は少し大学の位置づけが理解できたように感じた。

### 6.3 最後に

撮影日誌にあるようにたくさんのひとをわずらわせながら撮影が進められた。たった10分の映像であっても半年以上の歳月がかかっている。おぎなりに出来ないのはこれらの映像が残っていくことであり、言葉や仕草がその時の人間の感情を見事に表していることだ。

見直すと教員も卒業生も明るく自信に満ちている。それぞれがいろいろと苦労を重ねているはずなのに、自らの仕事を語る時は楽しそうであった。教員もこの10年に成長したのかもしれない。この映像が次の10年の礎(いしずえ)になることを祈りたい。



プレスしたBD-Disc/10周年ロゴデザインはデザイン学科・尹成済准教授制作